台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月、頁 141-162
2013-04-01 收稿、2013-04-13 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.141

晶子童話的詞彙特徵
—以《おとぎばなし少年少女》為例—

林立萍*

摘要

本文嘗試透過詞彙使用之觀點來了解曾活躍於日本文學史上有名之作家——與謝野晶子的用詞特色。討論材料初步以首度公開發表之童話集《おとぎばなし少年少女》(1910 年)爲主，從整理其詞彙的使用傾向來了解其童話詞彙的特色，期望成果能對晶子的童話詞彙研究、晶子研究有所助益。

經調查整理出以下幾點用詞特徵：

（1）篇名多用動物植物

（2）動植物種類豐富

（3）關於聲音之描寫細膩

（4）表聽覺表現之同一聲詞反覆出現

（5）一詞多表記及「丁寧表現」的使用

從這些特徵不難感受到晶子對大自然之喜愛以及敏銳的觀察力、動人的描寫力。這結果除了成爲討論晶子研究時之參考資料外，亦期待對晶子童話之用詞特色、詞彙全貌的掌握以及童話創作中的晶子像或與晶子相關之一切研究有所助益。

關鍵詞：晶子童話、動植物、聽覺表現、詞彙特徵

* 國立台灣大學日本語文學系副教授

Vocabulary Characteristics in Akiko's Children's Stories: "Otogibanashi ShounenShoujo" as an example

Lin, Li-ping*

Abstract

By looking at Akiko Yosano's anthology of fairy tales "Otogibanashi ShounenShoujo", which includes her first magazine presented work "The Courier Goldfish", the goal of this thesis was to examine the word usage in these stories, to investigate the characteristics of Akiko's vocabulary, and to think about Akiko with regard to the writing of fairy tales.

Through the results of this study, the following vocabulary characteristics were found:

1. The usage of animals and plants in the titles.
2. An abundance of animal and plant types.
3. A detailed description of voices and sounds.
4. A tendency to repeat word forms in auditory expressions.
5. The little use of multiple written forms for an individual word and Polite Expressions.

From these characteristics one can certainly get a feel for Akiko's love of nature, her subtle powers of observation, and her ability to portray emotions. In addition to being a springboard for discussions of Akiko related research, it clarifies all the details of the vocabulary in

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

Akiko's fairy tales . It is hoped that this study can be of further use to research concerning both Akiko and herself as a fairy tale writer.

Keywords: Akiko's Children's Stories, animals and plants, auditory expressions, vocabulary characteristics

晶子童話における語彙の特徴について
―『おとぎばなし 少年少女』を例にして―

林立萍*

要旨

本稿は、試みに、与謝野晶子の始めて雑誌に発表した「金魚のお使」が収められた童話集『おとぎばなし　少年少女』を対象に、その中に使用された言葉を手がかりにし､晶子童話語彙の性格を探り、童話創作における晶子を考えてみる。

結果としては、以下のように語彙の特徴を挙げられる。

（1）動物、植物がタイトルに登場

（2）動物、植物の種類が豊富

（3）声や音に関する描写が丁寧

（4）聴覚に関する感覚表現に反復語形の使用が傾向

（5）一語多表記や丁寧表現の使用が少々

これは、晶子の自然を愛する心、繊細な観察力、感動の描写力が確かなものであるが、今後、晶子を考える際のたたき台となるとともに、晶子の童話語彙の全貌解明、そして、童話創作における晶子像や晶子をめぐる研究につながることが期待される。

キーワード：晶子童話、動・植物、聴覚表現、語彙の特徴

* 国立台湾大学日本語学科副教授

晶子童話における語彙の特徴について
―『おとぎばなし 少年少女』を例にして―

林立萍

一、はじめに

晶子（1878.12.7～1942.5.29）は、『与謝野晶子 女性の自由を歌った情熱の歌人』（小学館版学習まんが人物／小学館、1996年）[1]という書名のように、「情熱の歌人」とも呼ばれ、情熱的な作品が多いと評される歌集『みだれ髪』（1901（明治 34）年）や日露戦争の時に歌った「君死にたまふことなかれ」が有名である。『源氏物語』の現代語訳でも知られる。晶子は、文学史上屈指の女性であるとともに、与謝野鉄幹の妻でもあり、十一人[2]の子供たちの母親でもあった。鉄幹と結婚後、経済的な困窮、出産・育児などで、晶子は、評論の執筆にだけでなく、童話の創作にも取りかかり始めたという。1907（明治 40）年 6 月の雑誌『少年少女』に掲載した「金魚のお使」は、晶子の初めて発表した童話である。その後、童話集『おとぎばなし少年少女』（1910（明治 43）年）に収録された。これを皮切りに、晶子は、二十年余りにわたって百編に及ぶ童話も創作したという。晶子は、歌人、詩人として活躍しただけでなく、小説家、童話作家、評論家、教育者でもあった。

このように、自由奔放でかつ情熱的で率直な歌を持って表現する歌人として知られている晶子は、童話創作においてどのような顔をもっていたのであろうか。また、晶子童話の語彙がどのような性格を帯びているのか、その語彙表現にはまたどのような晶子像が伝わっているのであろうか。二十年余りにわたって創作された百編にも及ぶ童話は、やはり晶子を考える際、見逃すことのできない材料である。本稿の目的は、晶子の始めて雑誌に発表した「金魚のお使」

---

1 監修：入江春行、まんが：あべさより、シナリオ：菅谷淳夫。
2 子供を十二人出産しているが、六男寸は生後 2 日で亡くなったという。

が収められた童話集『おとぎばなし少年少女』(以下「少年少女」と称す)を対象に、晶子童話の語彙の性格の一端を垣間見てみる。これによって晶子の童話語彙の全貌解明、しいては童話創作における晶子像を明確にすることで晶子研究の発展につながることが期待される。

二、晶子の童話について

晶子研究については、上笙一郎(1985)『私の生い立ち』、(1988)『与謝野晶子の児童文学』や井上史(1995)「晶子と寛への道標」、太田登(2010)「与謝野研究のための道標」からもわかるように、歌人論や短歌論に偏っている。晶子童話そのものに関する研究報告は少ない。これについては、古澤夕起子(1995:211)に、「童話は晶子研究の中でも遅れた分野で、正確な作品の数や執筆の期間さえ確定されていない」と述べられている。木俣修(1981)、古澤夕起子(1995、2003)、栗原浪絵(2007)によると、晶子の童話には、短編童話集として、『絵本お伽噺』(1908(明治 41)年)と「少年少女」の二冊があるという。前者には、二編の童話が収められているらしいが、内容が分かっていない。後者は、「金魚のお使」を含め二十七編の短編に挿絵を入れた B6 判 318 ページの単行本で、博文館から出版された。また、長編童話の単行本としては、『八つの夜』(1914(大正 3)年)、『うねうね川』(1915(大正 4)年)、『行つて参ります』(1919(大正 8)年、1924(大正 13)年『藤太郎の旅』と改題再版)がある。それに関する基礎テキストは、最近、ようやく整備されつつあるという。一方、「晶子童話」をキーワードにして国立国語研究所の公開した日本語研究・日本語教育文献データベースで検索すると一件の研究報告も見当たらなかった[3]。そういう意味では、言語学的見地から晶子童話へのアプローチはほとんどないと言えよう。

なぜ晶子に童話を書かせたのか。これについては、「少年少女」を紐解くと、「はしがき」に以下のような言及が見られる。

[3] 調査時期は 2013 年 3 月末。

自分の二人の男の児と二人の女の児とが大きく成ッて行くに従ツて、何かお伽噺が要るやうに成ツて参りました。それで、初の内は世間に新しく出来たお伽噺の本を買っツて讀んで聞かせるやうに致して居りましたが、それらのお伽噺には、仇打ちとか、泥坊とか、金銭に關した事とかを書いた物が混じッてゐたり、又言葉づかひが野卑であッたり、またあまりに教訓がかッた事を露骨に書いたりしてあッて、兒供をのんびり清く素直に育てよう、闊く大きく楽天的に育てようと考えてゐる私の心持に合はないものが多い所から、近年は出来るだけ自分でお伽噺を話して聞かせる事に致して居ります。…（略）

つまり、晶子は、一人の母親として日々大きくなっていく子どもたちに良い読み物を与えたいという気持ちから書き始めたということである。しかし、それは晶子の童話が書き始められたきっかけとしても、その後、昭和の始めまで二十年余りにわたって長短百篇に及ぶ童話を作り続けたのには、それなりの内的な理由があったからに違いないと古澤（1995：201）の指摘もある。また、生活上、物質に恵まれていないという栗原（2007：327）の経済的理由も参考になろう。それはともかくとし、逸見久美（1983：450）による以下の指摘のように、二十年余りにわたって百編に及ぶ童話創作には、やはりそれなりの晶子像が伝わっていると考えられ、創作家としての晶子を考える際に不可欠な視点である。

―（略）芸術家晶子において童話作家として占める位置は、他に比べて比較的小さいと思われる。しかし歌人として、近代短歌史に不朽の金字塔を樹てた晶子の才質の豊かさを示した業績の一つとして、その童話もまた無視することはできないのである。

（「与謝野晶子解説―与謝野晶子の児童文学－」より）

本稿は、晶子童話に使用されたことばを手がかりにし、それがどのような語彙の性格を帯びているのかを明らかにしてみる。これに

よって、今後、晶子を考える際のたたき台となるとともに、晶子研究に資することを願うものである。

三、調査対象としての『おとぎばなし少年少女』

前述したように、晶子が創作した童話は百編にも及ぶ。その中で最初に童話集として世に出たのは、1910（明治 43）年に博文館から出版された「少年少女」である。それは、現在、近代デジタルライブラリー[4]でデジタル画像で閲覧することができるほか、1981（昭和 56）年に講談社の発行した『定本与謝野晶子全集』の第十二巻『童話』にも収められている。また、春陽堂書店も 2007 年に単行本として与謝野晶子児童文学全集シリーズ『童話集少年少女』を出版した。「少年少女」には、構成もよく内容的にも優れた[5]、晶子の最初の発表した「金魚のお使」も含まれ、全部で、二十七編ある。それを開いてみると、「はしがき」の次に、二十七編の童話題名が三ページにわたって並べられている[6]。ざっと題名だけを一瞥してまず気がつくのは、多くの動物、植物が登場するということである。ちなみに紙幅もほとんど二十ページ以内に納まっているのである。参考に、各編に通し番号を付け題名と文字数を表 1 のようにまとめておく。いずれも文字数が三千五百字を超えない短編童話ばかりである。

表 1『おとぎばなし少年少女』の題名一覧

1.金ちゃん**蛍**（2,276 字[7]）　2.女の大将（2,585 字）
3.**燕**はどこへ行つた（2,407 字）　4.**鶯**の先生（2,705 字）

[4] 近代デジタルライブラリーは日本の国立国会図書館が公開しているインターネット上の電子図書館で、明治・大正・昭和前期の著作権が切れた、或いは著作権が存続しているが著作権者の許諾を得た図書資料をスキャンしてインターネット上に公開するサービスである。

[5] 詳しくは古澤夕起子（1995：203）「与謝野晶子の童話」『与謝野晶子を学ぶ人のために』（世界思想社）を参照されたい。

[6] 近代デジタルライブラリーで公開されたデジタル画像によって確認した結果である。

[7] 表記は、近代デジタルライブラリーで公開されている博文館版に依拠し、括弧内の数字は、タイトルを含めたその童話作品の文字数である。文字数は、全文をパソコンに入力しカウントした結果である。

5.**金魚**のお使（2,455 字）　6.お化**うさぎ**（2,141 字）
7.**蟲**の病院（3,580 字）　8.お留守番（2,300 字）
9.山遊び（2,555 字）　10.二コライと文ちやん（2,684 字）
11.**蟲**の音楽会（2,243 字）　12.**蛍**のお見舞い（2,262 字）
13.**紅葉**の子ども（2,6746 字）　14.芳子の蟲歯（1,893 字）
15.伯母さんの襟巻（2,485 字）　16.**蛙**のお舟（2,587 字）
17.美代子と文ちやんの歌（2,331 字）18.贈りもの（3,507 字）
19.**ほととぎす**笛（2,385 字）　20.**こけ子とこつ子**（2,037 字）
21.文ちやんの朝鮮行（2,363 字）22. 衣裳もちの鈴子さん（3,405 字）
23.**うなぎ**婆さん（2,721 字）　24.三疋の**犬**の日記（2,511 字）
25.赤い**花**（2,332 字）　26.鬼の子供（1,940 字）
27.早口（2,439 字）

（注：表記は原文のまま；括弧内は文字数；太字は筆者）

表１からも分かるように、動・植物名は、「燕」や「鶯」などのように一語としてだけではなく、「金ちゃん蛍」や「ほととぎす笛」などのように語の構成要素としても使用されている。数えてみると二十七編の中に動物や植物と関連のあるものが十五編もあるということが分かった。ここからは、はやり、晶子の動・植物に対する関心の一面が伺えよう。なかんずく、蛍と虫が二回も登場するということで興味深い。

さしあたり、今回はこの童話作品を調査対象に、晶子童話語彙の性格について考察を進めていくことにする。

四、『おとぎばなし少年少女』語彙の特徴

この節では、「少年少女」に使用された言葉を手がかりに、その語彙の特徴を考えてみる。

（一）登場する動・植物の種類

晶子の動・植物に対する関心は、各篇のタイトルからだけではなく、本文の随所にも伺われる。表２は、本文から動物や植物と関連

のある語をピックアップし、『分類語彙表』[8]を参考にまとめたものである。例えば、「1.5401 木本」という分類項目に属する語は、「柳の木」や「桜の木」などがある。そのうち、「藻の草」のように、分類番号が「1.5400-20」、「1.5402-03」、「1.5410-44」と複数ある場合は、前後の文脈から判断し、一つの分類番号に固定した。なお、「1.5501 哺乳類」以降の項目に属する語は、語数が多いため、参考に『分類語彙表』によってその下位の分類番号を添え整理してみる。

表 2　「少年少女」における動・植物の関連語彙

1.5401　木本	・柳の木　桜の木　松の木　巴旦杏　林檎
1.5402　草本	・藻の草　烏瓜　トマト
1.5410　枝・葉 花・実	・蓮の葉　紅葉 ・あぢさゐの花　アマリリスの花　菖蒲の花　菊の花　けしの花　柘榴（ざくろ）の花　月見草の花　合歓の花　藤の花 ・桜んぼう
1.5501　哺乳類	01 獣 02 カンガル　蝙蝠 03 猿 04 犬　小犬　黒犬　白犬　猟犬　狐　熊　狸　猫 05 獅子　虎 06 もるもっと　兎

[8] 『分類語彙表』は 1964 年に国立国語研究所によって公刊され、約 3 万 2 千語を意味によって分類・整理したシソーラス（類義語集）であり、現代日本語の本格的なシソーラスとして幅広く活用されてきた。2004 年に、さらに、収録語数を増やし、増補改訂版が刊行され、現代日本語の縮図であると言われている。増補改訂版は、初版の分類方法を踏襲し収録総語数 9 万 6 千語（異なり語数約 8 万語）を意味によって分類・整理したものである。分類は分類番号を用いて整理し、番号は、整数と小数からなっている。整数は、1 を「体の類」（名詞の類）、2 を「用の類」（動詞の類）、3 を「相の類」（形容詞の類）、を表すが、小数は四桁からなり広い概念から順に「類」「部門」「中項目」「分類項目」を表すようになっている。

	08 象　驢馬 10 鹿　らくだ 11 羊
1.5502　鳥類	01 雛　雛子　鶏の雛　小鳥 02 鷺 03 おしどり　家鴨　鴛鳥　鴨　雁 04 鷹 05 オオピントン　孔雀　鶴　雉子　山雀鶏　おや鶏　雌鶏　金鶏鳥　ミノルカ 07 鳩 08 あうむ　いんこう　ほととぎす 09 かなりや　烏　雀　燕　鶯　山の鶯
1.5503 爬虫類 両生類	01 蛇 02 蛙　青蛙　いぼ蛙　河鹿蛙　さま蛙　とのさま蛙　ひきがえる
1.5504 魚類	05 あいなめ　鰻　興津鯛　魚　金魚　鯛魚　鯛　飛魚　ほうぼう
1.5505　昆虫	01 蟲　ぼうふら 03 すいつちよ　蟬　油蟬　法師蟬　日ぐらし蟬　鐘叩き　きりぎりす　機織蟲　轡蟲　ばった　米つきばった　馬追蟲　こほろぎ　草雲雀　松蟲　鈴蟲 04 蝶 05 蟻　玉虫　水すまし　蛍
1.5506　その他の動物	03 赤貝　蝦　みみず　蛸・鮹　なめくじ

結果としては、動物の種類は植物を上回っているという傾向が見られよう。なぜ数多くの動・植物が晶子童話に登場するのかは、それは晶子の自然を細やかに観察し愛することを物語っているからで

あると思われるが、爬虫類・両生類の蛙は、「蛙」のほかに、その下位類にあたる「青蛙」、「いぼ蛙」、「河鹿蛙」、「さま蛙」、「とのさま蛙」、「ひきがえる」など、さまざまな「蛙」が登場したという点で興味をひかれる。

（二）動物の鳴き声に関する表現

晶子の自然を細やかに観察し深く愛する心は、数多くの動・植物が登場することから伺われると同時に、それに対する鳴き声や音・声の聴覚の感覚表現が丁寧に描写される点からも覗かれる。表 3 は、二十七編の童話からピックアップした動物の鳴き声に関する表現をまとめたものである。例えば、犬の鳴き声に関しては、「わんわん」と「わんわあん」と二種類見出され、それぞれが第 9 編の「山遊び」と第 21 編の「文ちやんの朝鮮行」に出現したということである。小犬の場合は、「わんわん」や「わんわあん」でなく、「わん、わん。」というように「、」の使用によって異なったイメージが受け止められよう。なお、「わん、わん。」のように、本文においてはその前後に引用括弧で付けられ直接引用の場合は、参考に”。”を付けて示す。

表 3　動物の鳴き声に関する描写

種類	動物の鳴き声を描写する語形	出典
犬	わんわん	9,21
	わんわあん	21
小犬	わん、わん。	24
猫	にやあ、にやあ	9
	にやおん	15
虎	ううう	21
雛	こけ子、こつ子。	20
鶏	こつ、こつ、こつ、こつ。	25
雀	ちゆう、ちゆう、ちゆう、ちゆう。	3
鶯	ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、	4

	ケキヨ、ホオホケキヨ。（後述）	
	ほおけきよお。	8
山の鶯	ホオケキヨ、ホオケキヨ。	4
蛙	ごう、ごう、ごう。	7
	があ、があ、があ、があ、があ、があ、があ。	11
河鹿蛙	りん、りん、りん。	16
法師蟬	つくほうし、つくほうし、つくつくほうし、つくほうし。	11
油蟬	ぜみ、ぜみ、ぜみ、ぜみ、ぜみ。	11
鐘叩き	かん、かん、かん、かん、かん、かん、かん。	11
きりぎりす	ぎいつちよん	1
	きりぎりす、すちよん、きりぎりす、きりぎりす、ちよん。	11
轡蟲	がちやがちや	1
	がちや、がちや、がちや、がちや、がちや。	11
馬追蟲	すいつちよん、すいつちよん、すいつちよん、すいつちよん。	11
こおろぎ	ころころ	1
	ちんちろりん、ちろりん、ちろりん、ちんちろりん。	11
ひぐらし蟬	ちちりん、ちちりん、ちちりん、ちちりん。	11
草雲雀	ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい。	11
松蟲	ちん。 ちん、ちん。 ちん、ちん、ちん。 ちん、ちん、ちん、ちん。	11
鈴蟲	りん。 りん、りん。 りん、りん、りん。 りん、りん、りん、りん。	11

表３からもわかるように、動物の鳴き声に関する描写は、語形を繰り返して表現する傾向が伺われ、これも一特徴として指摘できよう。例えば、鶏の「こつ」は「こつ、こつ、こつ、こつ」で四回繰り返して表現される。語形を繰り返す回数は、小犬「わん」の一回から蛙「があ」や鐘叩き「かん」の七回が最多であるが、六回のは無かった。そのうち、鶯の鳴き声に対する注意は特に深く払っているように思われる。例えば、第五編の「鶯の先生」には、以下のような描写が見られる。

資料（一）鶯の鳴き声に関する描写

…（略）…。さうしますと鶯の先生は谷渡りといふ鳴方をして聞かせます。

「ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。」

といふんです。

弟子の鶯は黙つて其の時は聞いて居るのです。山の鶯自身は、

「ホオケキヨ、ホオケキヨ。」

だけしか歌へないんです。

その日家へつれて帰りますと、

「ホオケキヨ、ケキヨ、ケキヨ。」

位いふのです。あくる日はまた、

「ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ。」

と覚えます。それからまた、

「ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。」

（略）

「一等の声をきかせて貰ひたいものですね。」

「よろしい、まあ座敷へ通つてきいて下さい。」

といつて、おかね婆さんは隣の室で小聲で、

「いいかい、ケキヨが五つだよ。」

おつるは悲しさうな顔をしながら、だまつてうなづいて居ます。

「ホオホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホオホケキヨ。」

「いかがです。」

おかね婆さんは隣の間を覗いて、かう云ひました。

「どうも好い聲だ、早速ねがひませう。」

（注：下線は筆者；「鶯の先生」より）

鶯の鳴き声のように、語形を繰り返すことによって動物の鳴き声に対する関心を見せてくれたのは、ほかにも、松虫と鈴虫の鳴き声がある。例えば、第七編の「蟲の音楽会」には以下のような内容がある。

資料（二）松虫と鈴虫の鳴き声に関する描写

…（略）…。

「それや分りますとも、野では皆が一緒に啼いて居るのですもの。」

などと人は皆云つてましたが、いよいよ二疋の蟲が出て来ました。

「ちん、ちん、ちん。」

と松蟲が先づ啼き出しました。

「りん、りん、りん。」

と鈴蟲は歌ひます。

「ちん。」

「りん、りん。」

「ちん、ちん。」

「りん。」

「ちん、ちん。」

「りん、りん、りん、りん。」

「ちん、ちん、ちん、ちん。」

「これが一番ですね。」
「いつまでもうたつて居て欲しいのね。」
「鈴蟲――。」
「松蟲――。」
と、うれしさの余りに騒ぐ人もありました。二疋の蟲は一本づつ金の笛を貰ひました。皆は大よろこびでお家へ帰ります。

（注：下線は筆者；「蟲の音楽会」より）

なぜ登場した数多くの動物の鳴き声の中で鶯や松虫と鈴虫のだけが丁寧に描写されたのかは、これはもちろん晶子のそれに対する特別な感情表出が関係していると思うが、もう少し調査範囲を拡大して全面的な検討は他日を期すことにしたい。

（三）音や声に関する描写

語形の繰り返しから伺われる晶子の聴覚に対する感覚表現の描写は、動物の鳴き声だけに限るのではなく、物の音とか人間の声などにも見られる。例えば、表 4 に示された「ちやぶん、ちやぶん、ちやぶん。」は、第 5 編「金魚のお使」で使用された表現で、金魚が金盥の中へ飛び込んだときの音を描写するもので、「ちやぶん」が三回繰り返して表現された。また、物の音に関する描写は、表 5 にまとめられたように、特に笛に関する表現のバリエーションが富んでいる点で注目されよう。

表 4　動物に関する音声描写

種類	動物に関する音声描写	出典
金魚が金盥へ飛び込んだ音	ちやぶん、ちやぶん、ちやぶん。	5
金魚の鼾声	ぐう、ぐう、ぐうぐう。	5
狐の鼾声	ぐう、ぐう、ぐう。	15
	ぐう、ぐう	

狸の腹鼓	ぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん、ぽんぽんぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん、イヤホ、ぽんぽん。	6

表 5　物の音に関する音声描写

種類	物の音に関する音声描写	出典
鐘	があん、がんがらがん、があん。	10
笛	ぴい。	5
	ぴり、ぴりぴりぴり、ぴりっ。	5
	ピイ、ピイ、ピイ。	9
ほととぎす笛	きよん、きよん、きよん、きよん。	19
	ホンゾンカケタカ	
鈴	じやらんじやらん。	24

表 6 は、人間の声にする関する描写をまとめたものである。表 6 からも分かるように、晶子の人間の泣き声に対する描写は、さらに、イ母音系の「ひひい、いん、いん。」とア母音系の「あああ。」とに分けられ、注目されよう。その中、「いん、いん」は、一般の辞書やオノマトペの辞書においては見出しとして載せられていないものの、資料（三）に示したように、名詞として一語だけではなく、語の構成要素として使用される点も特筆すべきであろう。

表 6　人間の声に関する聴覚の感覚表現

種類	人間に関する声を描写する語形	出典
笑い声	ほほほ。	3
	は、は、は。	17
	ほ、ほ、ほ。	24
泣き声	ひひい、いん、いん。	2
	ひひい、いん、いん、いん。	
	あああ。	14

	わああ。	19
	ああ、わああ。	17
	あ、あ、あ。	1

資料（三）「いん、いん」の使用について

「羞しいこと、いんいんの大将だね。」
と伯母さんが仰しやいました。
「さうです、女の大将です、いんいん女の大将といふのです。」
「女の大将といふだけで好いわ。」
と静子さんはいひました。平常はこんな元気の好い子なんですが、
一寸したことから、
「ひひい、いん、いん、いん。」
が初まるのです。近所の人もこれが初まりますと、
「松本さんの内で、いんいんが初まつたから戸を閉めませう。」
といつて、眉をひそめるのです。静子さんの内の下女が、ある時隣へまゐりまして、
「おかみさん、内のお嬢様は大将様におなりになるのださうです。」
といひました。

（注：下線は筆者；「女の大将」より）

このように、「少年少女」において見られる音や声に関する響きの描写やオノマトペの特徴の一つである語形の反復を使用する点から、晶子の自然を愛する心、繊細な観察力、感動の描写力に、人々は魅了されよう。

（四）ことばの用語用字について

「少年少女」語彙の特徴としては、一語多表記や丁寧表現の使用も挙げられよう。例えば、「機織蟲」に関する表記は、資料（四）

に示したように、片仮名の「ハタオリ」や平仮名の「おはたおりさん」と漢字表記の「機織蟲」が見られる。

資料（四）「機織蟲」の表記について

それから五号室へ入つて行きました。札にはハタオリと書いてありました。
「これは大切な患者なんですよ。」
「どうして。」
「あのね、あんまり機を織つたので手を折つたらしいつて兄様が仰しやつたのですわ。」
と豊子さんは小声でいひました。
「はたおりさん、もうけふ包帯を替へてもらひましたか。」
「はい、今朝ほどすませていただきました。」
と機織蟲は女らしくいひました。

（注：下線は筆者；「蟲の病院」より）

同じ作品の中で異なった表記の使用例は、そのほかに、「周章てる」と「慌てる」、「石榴」と「ざくろ」、「雛」と「ヒヨコ」、「吾妻コオト」と「吾妻コート」などがある。これは、単に名詞や動詞といった自用語だけにとどまらず、音を描写する副用語にも見られる。例えば、笛の音に関する表現には、「ぴい」と「ピイ」（表 5 参照）がある。これには、晶子が意図的にそうした表記を使い読み手に何か伝えたいものではないかと考えられるため、一つの特徴として考えられよう。

また、お化粧の意味を「おつくり」に、相手を敬ってその足を「御御足（おみあし）」という丁寧表現も使用される。これらの語例は、動・植物の種類や音・声に関する表現ほど大量に拾うことができるわけではないが、晶子童話の用語用字の一特徴として指摘できるのではなかろうか。

五、終わりに

以上、「少年少女」に使用された言葉を手がかりに、晶子童話の語彙を考察した結果、以下のように語彙の特徴を挙げられる。

（1）動物、植物がタイトルに登場

（2）動物、植物の種類が豊富

（3）声や音に関する描写が丁寧

（4）聴覚に関する感覚表現に反復語形の使用傾向

（5）一語多表記や丁寧表現の使用が少々

なお、色の状態に関する色彩表現や、人名・地名などの固有名詞の使用や名前の付け方、「焼麩」「足袋」「天長節」「信玄袋」「犬張子」といった外国人の目から日本人の生活や文化と関連のある生活語彙・文化語彙も散在しているため、晶子童話語彙の一特徴として指摘したいが、紙幅の都合により割愛し、問題提起するだけにとどめておく。

人間は、混沌とした世界をことばによって切り取り、外界の事象を認識し把握している。「少年少女」には、動・植物や音・声に関する描写が豊富である。これは、晶子の自然を愛する心、繊細な観察力、感動の描写力が確かなものであるが、それには晶子が一人の母親として東京の大都会で生まれ成長する子どもたちに都会の失われていく、あるいは消えていく自然のいとなみに目を向けさせたいという強い思いもあったであろう。特に自然界に生きる動物や植物への関心は、自然の景物を歌材として短歌を詠む歌人の豊かな感性に基づくものであろう。いずれにしてもそれが晶子の自然と人間とのかかわり、晶子の自然観、育児観、人生観とどのように関連しあうのかは、非常に興味深いので、今後課題として取り組みたい。

晶子童話の語彙にどのような性格・特徴が帯びられているのかは、今回は、「少年少女」を材料にその一端を探ってみたが、その全貌は、また語彙データの整理と分析を進めるとともに、機会をあらためて考えなおしたい。そういう意味で、今回の考察は、そのための一つの中間報告としておきたい。

テキスト

講談社（1981）『定本与謝野晶子全集　第十二巻　童話』

参考文献

あべさより・ 菅谷淳夫（監修：入江春行）（1996）『与謝野晶子 女性の自由を歌った情熱の歌人』（小学館版学習まんが人物）小学館

逸見久美（1977）「与謝野晶子解説－与謝野晶子の児童文学－」『日本児童文学大系第六巻』ほるぷ出版（1983 年再版）

井上史（1995）「晶子と寛への道標」『与謝野晶子を学ぶ人のために」世界思想社

上田博・古澤夕起子編（1994）『金魚のお使い』和泉書院

上田博・古澤夕起子編（1994）『環の一年間』和泉書院

太田登（2010）「与謝野研究のための道標－新生「与謝野晶子の世界」の出発に向けて」『与謝野晶子の世界』第一号（通巻二六号）与謝野晶子倶楽部

上笙一郎（1985）『私の生ひ立ち』刊行社（2007 年春陽堂書店再版）

上笙一郎（1988）『与謝野晶子の児童文学』関西児童文化史研究会

上笙一郎（1993）『与謝野晶子の児童文学〔増補版〕』日本図書センター

木俣修（1981）「解説」『定本与謝野晶子全集　第十二巻　童話』講談社

栗原浪絵（2007）「明治期における与謝野晶子の創作活動－出産・育児をめぐる晶子の思い－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第 47 巻

講談社編集部（1981）「解題」『定本与謝野晶子全集　第十二巻　童話』講談社

佐藤通雅（1984）『日本児童文学の成立・序説』大和書房

関英雄（1983）『体験的児童文学史　前編』理論社

実川恵子（1994）「与謝野晶子童話の特質」『国文学解釈と鑑賞』59 巻 2 号、株式会社至文堂

古澤夕起子（1995）「与謝野晶子の童話」『与謝野晶子を学ぶ人のために」世界思想社
古澤夕起子（2003）『与謝野晶子：童話の世界』嵯峨野書院
松平盟子編著（1998）『母の愛　与謝野晶子の童話』ハースト婦人画報社
矢崎節夫（1993）『童謡詩人　金子みすゞの生涯』ＪＵＬＡ出版局

追記

本稿は「与謝野晶子台北セミナー」（2012 年 9 月 28 日）で発表したものに改題かつ加筆を行ったものである。このセミナーは与謝野晶子の没後 70 年、渡欧 100 年、与謝野晶子倶楽部設立 15 周年記念に台湾大学で実施したものである。席上、多くの先学より貴重なご意見を賜ったことにの紙面をお借りして厚くお礼を申し上げる。また、この小論の作成に当たってご助言いただきました太田登教授に深く感謝申し上げる。